

男女共同参画・働き方改革委員会企画 JOYFUL通信

◆◆◆ ステレオタイプの脅威を乗り越える ◆◆◆

埼玉協同病院関節治療センター 部長

桑沢 綾乃

“Draw a scientist test”をご存じですか？子供に「科学者を描いてみて！」と話し、描いた科学者が女性か男性かを見るテストです。2016年の調査で“女性”の科学者を描いた女兒の割合は、米国が58%に対し、日本は12%のみ。日本では“科学＝男性”という無意識の固定概念が強く表れた結果とされています。このように知らず知らずのうちに形成された固定概念が起こす無意識のバイアスをアンコンシャスバイアスと呼び、集団の中で当然のように受け入れられた固定概念をステレオタイプといいます。“ジェンダーステレオタイプ”の事例を挙げると、女性はピンク・ぬいぐるみが好きで理系は苦手…といった固定概念です。このステレオタイプは個を尊重せず概念に当てはめるため、社会心理学では有害と結論付けられています。日本はジェンダーステレオタイプ改善への取り組みが遅れているとも指摘されています。

このステレオタイプが自分に対しても脅威となることを証明した面白い実験があります。同程度の實力を持つ白人と黒人の大学生に10ホールのミニチュアゴルフをさせる実験です。同じ實力のはずですが、「運動神経を測定する」と言われると白人のスコアが悪化し、「スポーツ知能を測定する」

と告げると、今度は黒人のスコアが悪くなるのです。これは、それぞれが相手よりも劣ると思う固定概念に影響され、普段の實力を自らが抑制してしまう（ステレオタイプの脅威に晒される）ために起こる現象です。

このようなステレオタイプの影響は整形外科の世界にもまだまだ存在するのではないのでしょうか？「力仕事は女性に不向き」「女医に外科系は厳しい」と口にする女性研修医は今も後を絶ちません。まさにジェンダーステレオタイプの脅威で自ら可能性を狭める発言です。また、「女医さんは…」と一括りに話す先生も少なくないと感じます。マイノリティはステレオタイプの影響を受けやすく、一括りで考えられがち。でもマイノリティの中にも多様性はあります。性格も環境も仕事への意欲もみんなそれぞれ。女医だから…はありません。私たちは、男性も女性も常に無意識のバイアスに支配されステレオタイプに当てはめていないかを確認し、もっと意識的に個の多様性を発見する努力が必要ではないのでしょうか？

最後に、このようなステレオタイプの脅威を自身が乗り越えるために必要なこと、それはポジティブへの変換だといわれています。そして自分にとっての外せない価値

観を見つけること、これが負のステレオタイプに動じない強さに繋がるそうです。整形外科が面白い・好きという想いは強い武器になります。もちろん、女性医師は出産や育児などライフイベントの代償もあり、周囲の理解なくして成り立たないことも多いのは事実です。周囲への配慮や感謝は絶対に必要です。私も自分を認め支えて下さった上司、応援して下さいる学会の先生方のおかげで今があり、感謝してもしきれないと思っています。それでもステレオタイプの脅威に臆することは多々ありました。そんな時でも仕事を続けられたのは、ただただ“股・膝関節が好き”という強い想いと、数少ない女性の下肢人工関節専門医であることは“強み”と捉えた発想の転換だったと思います。周り道にしても信念があればなんとかなるものです。

出産や育児、まだまだ全てに環境整備ができない今の時代、女性医師はこうあるべきという固定概念などありません。人それぞれ違う生活環境の中で、悩みつつ、信念を糧に、自分のストーリーを作るしかありません。ステレオタイプの脅威を乗り越え、自分の歩調で一つずつ精進してほしい、またそれを認められる社会であってほしいと切に思っています。